

日本の「安心」はなぜ、消えたのか（1）

山岸俊男

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

「心がけ」では

何も変わらない！

日本人の心は荒廃したか？

ここ数年、「日本社会のモラルの崩壊」あるいは「日本人の心の荒廃」といったテーマがマスコミや政治の世界、あるいは教育の世界でさかんに論じられています。

品質を偽装し、消費者を平気で騙す企業が続々と明らかになるのも、あるいは社会の決まりを守らない若者たちがいるのも、そして同級生をいじめる子どもたちがいるのもすべて、日本人の心が荒廃し、日本全体のモラルが低下しているからではないかというわけです。

たしかに、ここ数年のマスコミ報道を見れば、日本社会が「悪い方向」に向かっているのではないかと不安に駆られるのは無理もないことです。

経済界を見れば、企業モラルが問われるスキャンダルが次々と明らかになっていきます。最近筆者が住む北海道でも、食品業者による牛肉偽装事件が起き、それに続く形で今度は、有名菓子メーカーの賞味期限偽装が発覚しています。また、ライブドア事件ではインサイダー取引までを行なう「なりふりかまわぬ利益追求の姿」に批判が集まりました。

こうした事件の続発に対して「古きよき日本の商道德」が失われてしまったと感じる人は少なくないようです。すなわち「アメリカ流のハゲタカ資本主義が日本の経済界を墮落させてしまった。顧客を騙してでも儲けようという企業が現われるのは、その表われた」というわけです。

また、最近の若者に対して、マユをひそめる大人たちが増えているのも事実です。

いじめの横行、フリーターの増加、公共道徳を守らぬ、自分勝手に傍若無人ほうじやくぶじんな振る舞い——こうした若者たちを見て、大人は「戦後の教育がよくなかった」と溜め息をつきます。「ゆとり」や「人権」を尊重しすぎて、我々は子どもを甘やかしすぎたのではないか、というわけです。

経済界の問題にしても、子どもたちの問題にしても、そこで問われているのは「日本人の心」です。

つまり、今の日本がさまざまな問題を抱えているのは、すべて「日本人の心の荒廃」「モラルの低下」が原因であって、そこをどうにかしないかぎり、どうにもならないというわけです。かつての日本人が持っていた「品格」を取り戻そうという本がベストセラーになり、武士道の見直しや道徳教育の復活が叫ばれているというのも、その流れの中で起きていると言えるでしょう。

かつての日本人は清く正しかったのか

筆者は北海道大学の大学院で、「信頼」や「安心」といったテーマで社会心理学の研究をやっている関係で、このところマスコミから「日本人の心の問題」についてコメントを求められたり、取材を受けたたりすることが少なくありません。また、「日本社会における信頼の回復」といったテーマで講演をしてほしいという依頼が舞い込んでくることもしょっちゅうです。

しかし、そこで私はかならずこう聞くことにしています。

「日本人の心は荒廃したとおっしゃいますが、もしそうだとするならば、「かつての日本人の心は清く美しかった」ということになります。それは本当なのでしょうか」

こんなことを言われると、たいていの人は驚いて、口ごもってしまいます。

「……そりゃ、今よりは昔の日本人のほうが立派だったんじゃないでしょうかね」

「本当にそうでしょうか？ たとえばいじめの問題にしても戦前の日本陸軍には新兵いじめという、陰湿で理不尽なリンチの伝統がありました。軍隊はそれを黙認するどころか、奨励さえしていたじゃないですか。また、戦時中に疎開先でいじめに遭ったという話はよく聞きます。さらに言えば、農村では『火事と葬式以外は付き合わない』という村八分むらばちぶが行なわれていたそうです。これなんかは、組織のないじめではないですか？ それでも昔の日本人のほうが立派だったとおっしゃいますか」

「うーん、でも、マンションの耐震強度を偽装したり、牛肉のミンチと言いながら豚肉を混ぜて

売るような悪質な企業は昔はなかったでしょう」

「はたしてそうでしょうか？ 高度成長期には住民の健康に害があると知りつつ、有害な廃棄物やガスをまきちらして公害病患者をたくさん作った企業がいくつもありました。もつと歴史を遡さかのぼれば、明治時代には足尾鉍毒事件で多くの村が汚染されました。そのほうがもつと悪質とは言わないのですか？」

「それでも昔の日本人のほうが勤勉で、真面目でしたよ。それに比べて今の若者と来たら、根性もなければ勤勉の精神もない。困ったものです」

「でも、昔は一生懸命働かなければ食えなかったから、しょうがなく働いていたという部分もあるでしょう。仕事が好きな人ばかりじゃないですよ。その点、今はフリーターでも何とか食っていけるわけで、昔よりもずつといい時代になったという考え方もありますよ」

「……（無言）」

「昔はよかった」式批評のおかしさ

古代エジプトだか古代メソポタミアだかの遺跡の出土品に書かれていた文字を解読してみたから、「近頃の若い者は……」ということが書かれていたという話を聞いたことがあります。この話がはたして本当なのかどうかは知りませんが、人間に「昔はよかった」と過去を美化して考える傾向があるのは事実でしょう。

人間が過去を美化しやすい理由はいろいろあるでしょう。

過ぎ去った時代は二度と戻ってこないものですから、美しく見えてしまうのは当然のことでもあるし、また、多くの人にとつての「昔」とは、若い時代に自分の身の回りで直接に見聞きしたことが基本になっています。「私の子どものころは、そんなことはなかった」というわけで、つまり子ども時分の見聞なのですから、そう大した事件などあるはずもありません。それに対して、「今どき」というのは、大人になってからマスコミなどを通じて知識を得ているので、極端なケースや大事件をいっぱい知っています。

つまり、昔と今とでは情報源がまったく違うわけなのですから、「昔はよかった」という話になつてしまうのは当然のことなのです。いずれにせよ、それらは単なる印象批評で、ちゃんとした根拠があるというわけではありません。

ところが、今の日本で語られている「社会問題」なるものの多くが「昔はよかった」式の話ばかりで、きちんとした客観的データに基づいた議論があまりにも少ないのには困つてしまいます。しかも、それが政治の世界でも堂々とまかり通つているのですから恐れ入つてしまいます。

断わつておきますが、私は何も「日本人の心は昔から汚かった」などと言うつもりは毛頭ありません。そもそも、たとえば「A国の人の心は、B国の人の心よりきれいだ」などといった具合に、人間の心を比較し、優劣をつけること自体がナンセンスな話で、一歩間違えれば、ナチスなどの人種差別主義につながりかねない危険な考え方と言えます。

そんなことより私が言いたいのは、「何でも心のせいにするのは止めてくれ」ということなのです。

心理学の一分野である社会心理学を研究している私が、こんなことを言うと奇異に思われるかもしれませんが。しかし心理学を研究しているからこそ、世の中の出来事をすぐに「心」に結びつけて語りたがる今の日本の風潮は非科学的なものに見えてしかたがないのです。

精神論は思考停止と何ら変わらない

何か事件が起きたとき、それを当事者の「心」がもたらしたものと片付けるのは簡単なことです。

「消費者を欺くあざむような悪いことをするのは、企業家としてのモラルが低いからだ」

「いじめをする子どもが増えているのは、子どもたちの心が荒れているからだ」

「ちよつとしたことで会社を辞める若者たちは、子ども時代の親のしつけに問題があるのだ」
たしかに、こうした問題の根底に「人間の心」が関係しているのは否定しません。

しかし、だからといって、それを当事者の意識が足りないからだとか、根性がよくないからだとか、各人の心にすべての原因を押しつけてしまうだけでいいのでしょうか。本当の原因はもつと別のところにあるのかもしれないのに、その検討をろくにしないでそれぞれの人間の「心構え」に責任を求めてしまうのでは、思考停止と批判されてもしょうがないと思うのです。

今の日本が大きな時代の転換点にさしかかって、さまざまな問題を抱えているのは事実です。これまで日本人が共有していたさまざまな価値観が揺らぎはじめ、社会としての一体感が失われているのは否定できないことでしょう。また、未来へのビジョンが見えにくい時代になり、誰もが将来に対する不安を抱いているのも間違いありません。

だが、そうしたさまざまな問題に対処するに当たって、いきなり「心がけがよくない」とか「心が構えが悪い」というお説教をしてしまうのでは、そこで議論が終わりになってしまつて、本当の解決に結びつかなくなつてしまいます。

それは戦前の日本の軍人たちが、あらゆる問題を精神論で片付けようとしていたのとまったく同じことです。

戦争において本当に大事なものは戦略であり、戦術であり、武器であり、兵站へいたんであるはずなのに、負けたのは兵士に「必勝の精神」が足りないからだと言つてしまえば、それですべての議論が終つてしまいます。負けたのは何が原因で、誰の責任なのかをきちんと追求すべきなのに、すべてが「心のあり方」に責任転嫁されてしまう——これでは問題の解決も目的の達成もできるはずがありません。

歴史が証明した「心の教育」の無意味さ

いや、さらにもつと過激ラジカルなことを言わせてもらえらば、そもそも「心がけをよくしなさい」

というお説教くらいで、人間の行ないは改まるものなのでしょうか。正直に言えば、私はこれについて否定的な考え方をしています。

ご承知のとおり、今の日本では教育論議がさかに行なわれていますが、そこで重要なテーマになっている一つが「心の教育」です。つまり、子どもたちに幼いころから倫理教育、道徳教育を施して「美しい国」を作ろうという話なのですが、私はこうした議論を聞くたびに溜め息を吐いてしまうのです。

なぜかといえば、いくら国民に徹底した倫理教育を施したところで、「いい国」「美しい社会」など生まれまいということは歴史が証明しているからです。なぜ教育改革論者たちは、こうした歴史の教訓に対して無関心なのでしょう。私はそれが理解できないのです。

二〇世紀において国民に対する倫理教育・道徳教育に最も熱心だったのはソ連や中国といった社会主義国家でした。

マルクスは、資本主義体制が崩壊して社会主義、共産主義の世の中がやって来たあかつきには、人間の心の中にある「悪しき利己心」は自然に消えてなくなると考えていたようです。人間の利己心は資本主義という社会構造がもたらしたものであって、社会構造が変われば人の心も自然から変わっていくと考えていたのです。

ところが、実際に社会主義体制になっても、なかなか人間の心から「資本主義時代の利己心」が消えてなくなりません。そこで業を煮やした社会主義国の支配者たちは徹底したイデオロギー

教育を国民に施すことで、人々に利他の精神、奉仕の精神を植え付けようとなりました。

しかし、その結果はどうだったでしょうか。

皮肉なことに、ソ連や中国などの社会主義国家では他人に奉仕する立派な国民が生まれるどころか、それとは逆のことが起きてしまったのでした。

「大釜の飯」を追放できなかった共産中国

改革開放前の中国でよく使われた表現に「大釜おおがまの飯」「鉄腕てつわんの飯」という言葉がありました。

ご承知のとおり、かつての中国では農業も工業も、すべての産業が国有化されていて、そこで働いている国民たちはいわば公務員のような立場にありました。

そうした環境に置かれると、人間は誰だって真面目に仕事をしようとしません。なぜならば、どんなに頑張っても働いたからといって収入が上がるわけでもないし、逆にいくら怠なまけていても食いはぐれることもないからです。

国家が「大釜」あるいは「鉄腕」の飯、つまり収入を保証してくれているのですから、真面目に働くだけ損をするというわけです。

日本でもかつての国鉄や郵便局に対して「親方日の丸」といった批判が言われていたのですが、中国の場合、「大釜の飯」「鉄腕の飯」という精神が国中にはびこって、それが中国経済の停滞をもたらす最大の原因になっていたのです。

それと同様のことは旧ソ連でも起きていたわけですが、中国もソ連もこうした国民たちの「怠け心」を教育によって徹底的に矯正しようとはしました。そればかりか、働かない人間に対しては嚴罰を下し、「強制収容所に入れるぞ」と脅かすことで、国民に勤勉の精神、奉仕の精神を植え付けようとしたのでした。

しかし、そうした方法をいくら行なっても、中国でも旧ソ連でも事態を改善することはできず、ソ連に至ってはついに国家ごと滅びてしまったことは今さら言うまでもないでしょう。

タブラ・ラサの神話

さて、この中国の例が私たちに教えているのは、「人間の心は教育によって、いかようにも作り変えることができる」という考えがまったくの誤りであったという事実です。

教育が、人間が文化的な生活を送っていくうえで必要不可欠なものではあることは事実です。しかしながら、教育で知識を教え込むことは可能でも、人間性に反した形に心を作り変えることはできない。教育は万能ではないのです。そのことを中国や旧ソ連の例は教えてくれています。

二〇世紀の社会科学における、最大の誤りの一つは「タブラ・ラサの神話」を信じたことになりました。

タブラ・ラサとはラテン語で「白板」のこと。

つまり、生まれたての赤ちゃんの心は何も書き込みのないホワイトボードのようなものであつ

て、そこに適切な教育を与えることで「立派な人間」が作れるはずである——今の言葉で言えば、赤ちゃんの脳みそは初期化されたコンピュータのようなもので、そこに適切な教育によってプログラムを組み込めば、思いどおりの理想的な人間ができると考えたのが「タブラ・ラサ」の考え方です。

中国や旧ソ連といった国々が、何の見返りがなくとも同胞に奉仕するような立派な人民をイデオロギー教育によって作り出せると信じたのも、結局はこの「タブラ・ラサの神話」と同じ発想が根底にあつたからに他なりません。

しかし、そうした教育はついに成功することはなく、ソ連は消滅し、中国もまた大きな方向転換をせざるをえなくなりました。

その理由は今さら言うまでもないでしょう。人間の心はけっしてホワイトボードなどではなかつたというわけです。

考えてみれば、それは当然すぎるほど当然のことです。

私たちの身体のすべての部分は、脳も含めて生命進化の中で作られてきたものです。人間に指が五本あるのも、目が二つあるのも、それが私たちの生存にとって必要であつたからに他なりません。

つまり、これは目にも手にも、それぞれの役割や働きが生まれながらに与えられているということでもあります。目で音を聞くことはできないし、手で息を吸うことはできない。これは当然

のことです。

だとしたら、人間の脳だけが例外であるはずがありません。脳の働きや役割もまた生命進化の中で作り出されたものであって、それを人間の都合で勝手に変えることはできないというわけです。

そもそも私たち人間が生きていけるのは、進化の長い歴史の中で獲得された「生きるためのプログラム」が脳の中に組み込まれているからに他なりません。考えてもみてください。もし、人間の脳が最初は白紙状態であったとするならば、厳しい自然環境の中で人類は生き延びていけたでしょうか？ もちろん、そんなはずはありません。

「人間性」を無視した教育をやるうとした社会主義国

こうして論理的・科学的に考えていけば、人間の心が「タブラ・ラサ」であるわけもないことは誰の目にも明らかというものです。

実際、近年の脳神経科学や認知科学の進展は、人間の心に最初から組み込まれた「プログラム」こそが、いわゆる「人間性」の根本になっていることを次々に明らかにしています。

しかしながら、二〇世紀の社会科学はこうした自然科学的なアプローチを軽視して、イデオロギーで人間を考えるという大きな失敗をしてしまいました。その象徴が、旧ソ連や中国といった社会主義諸国のイデオロギー教育であったと言えます。

結局のところ、こうした社会主義の国々が失敗したのは、人間の心に最初から組み込まれている「人間性」を無視した教育を行なおうとしたことにありました。

マザー・テレサのような、ごく一部の例外は別として、何の見返りもないのに他人のために働くといった人間性は、残念ながら私たちの心の中にはないのです。だからこそ、どれだけイデオロギー教育を施しても、人間の心に純然たる博愛精神を植え付けることはできなかったというわけです。

社会問題を解決するには、まず人間性の研究から

しかし、こう書いていくと、読者の中には次のようなことを感じる方がきつとおられるはずで
す。

すなわち「人間の心には、あらかじめプログラムが仕込まれているというのなら、教育も社会改革といった努力も意味がないということにならないか？」という反論です。

たしかに、私たちの人間性の本質がすでに進化の流れの中で決まっているのであれば、人間が何をやっても意味がない——そう悲観的に考えるのは無理もないことです。しかしながら、私はそう思いません。

なぜならば、心の中にある「人間性」の本質が分かれば分かるほど、その性質をうまく利用することによって社会の中にあるさまざまな問題を解決することが可能になると思うからです。

「人間性」をうまく利用することで、社会問題が解決できる——そのことを端的に示しているのが先ほどの中国の例です。

すべてが国营企業で行なわれていた時代の中国の人たちは、「大釜の飯」「鉄腕の飯」でちっとも勤勉に働くとはしませんでした。その理由は先ほども述べたとおり、何の見返りもない環境で他人のために奉仕をするという心は、私たちの「人間性」の中になかったからです。

ところが、このような中国で資本主義原理が導入され、「改革開放政策」が行なわれるようになったら、何が起きたでしょうか？

その答えは言うまでもないでしょう。

今まではどんなに政府が旗振りをして働かなかった人たちが、目の色を変えて働くようになったのでした。

もちろん、中国の人たちが一生懸命に働くようになったのは、資本主義によって奉仕の精神に目覚めたせいではありません。国营企業時代は「働かなくても食っていける」社会だったのが、今度は「働けばもつといい生活ができる」社会になったからで、自分や自分の家族のために猛烈に働くようになったにすぎません。

しかし、どんなにイデオロギー教育を行ない、怠け者に厳罰を与えても、いつこうに解消されなかつた中国経済の非効率さが、これによって解消されたことは誰にも否定できない現実です。

人間が進化の過程を通して身に付けてきた「人間性」を修正しようと無駄な努力を重ねるより

も、それを事実として受け止めたうえで、その人間性を上手に活用することで社会の問題を解決していったほうが、ずっと建設的ではないかと思うのです。

「心の教育」では問題は解決しない

さて、話が長くなつてしまいました。では二一世紀の今日、私たちは「タブラ・ラサの神話」から卒業できているでしょうか？

残念ながら、それは違うようです。

そのことは現代の日本を見渡すだけでも明らかです。

日本の社会で起きているさまざまな事件や問題について、その原因を「心」に求め、きちんと子どもたちに教育をしさえすれば事態は改善すると思つている人が、どんなに多いことか。私はこの現状を見るたびに、溜め息をついてしまいます。

すでに世の中は二一世紀。ソ連も滅び、中国も社会主義を事実上、返上したというのに、いまだに戦前の軍部や社会主義諸国の指導者たちと同じ精神論を振りかざして、「心がけ」で問題を解決しようとする人が多いことには怒りを通り越してあぜん啞然としてしまうほどです。

それは、たとえば「いじめ問題」についても言えます。

今の日本で行なわれている、いじめ論議の多くは、家庭や学校の教育を通じて「いじめをしな子ども」を育てようといった話だったり、あるいはもつと教師が子どもたちに対する監視を強

めることで、いじめを減らしていこうという対策だったりするわけですが、はたしてこうしたやり方で「いじめ問題」を解消することはできるでしょうか。

私の答えは、残念ながら「ノー」です。そんな発想でいるかぎり、今の日本が抱えている「いじめ問題」は解決できるはずもないし、かえって問題をこじらせる危険性だってあるというのが筆者の考えなのです。

いじめのない国なんて作れるはずがない

先ほども書きましたが、そもそもしじめという現象自体は何も今に始まったことではありません。戦前の日本にもいじめはあったし、日本以外の国でもいじめは起きています。

アメリカでもイギリスでも、中国でもインドでも、どんな国の学校にも「いじめっ子」はいるし、「いじめられっ子」もいるのです。そのことは子どもたちの世界を扱った外国の映画や小説、たとえば『ハリー・ポッター』シリーズなどを見たりするだけでもすぐに確認できる話です。

つまり、いじめは現代日本だけに限った現象ではなく、人類共通の現象であるということですが、それは言い方を換えるならば、私たちの心の中には残念ながら「他人をいじめろ」という人間性がどうやら潜^{ひそ}んでいらしいということでもあります（実は、私は「いじめをする心」にはマイナスの側面だけでなく、プラスの側面もあると考えているのですが、そのことについては後述します）。

ところが、今の日本では「心の教育」をすれば、いじめをしない子どもができるという前提で議論が進んでいます。ここに私は、今の日本のおかしさが潜んでいると思うのです。

改めて言うまでもなく、「いじめをする心」を教育によって修正することができるといふ発想は、旧ソ連や中国で行なわれた「イデオロギー教育」と何ら変わることはありません。

事実、古今東西、ありとあらゆる国家や社会の中で、「いじめ」を完璧に追放した社会があったという話を一例も私は知りません。教育で「いじめの心」をなくせると言う人たちに、この点についてどのように考えているのか、ぜひお聞きしたいところです。

結論を先に書いてしまえば、いじめをなくそうとするのは、まるで砂上さじょうに楼閣ろうかくを建てるようなものだと言っても過言ではないと私は考えているのです。

これがいじめ解決の「最終兵器」!?

いや、砂上に楼閣を建てる、というのはちよつと言ひ過ぎかもしれません。なぜならば、教育以外の方法にまで話を広げれば、いじめを根絶する「妙策」がないわけではないからです。

いじめをなくす最も確実な方法は、親や教師が子どもたちを徹底的に監視し、彼らの行動をコントロールしてしまふことです。

先ほども述べたように、どんな子どもにも「いじめをする因子」があるわけですから、たとえ気の優しそうな子であっても油断はできない。大人たちが優等生だと思っている子どもが、

とんでもないいじめっ子だったという話は、充分ありえることです。

ですから、いじめの発生を抑止するには、ありとあらゆる子どもの行動をつねに監視することが必要です。

そこで、カネに糸目をつけず、学校のありとあらゆるところに監視カメラと盗聴器を付け、それで朝から夕方まで専任の監視員が、子どもたちの動きをマンツーマンで見張りする。さらに学校が終わったら寄り道をさせず、まっすぐ自宅に帰宅させ、親の監視下に置く。当然ながら、放課後、友だちとの自由な接触は禁止です。

しかし、それでも目の届かないところがかならず出てくるはずですから、「いじめ密告奨励制度」を作ることも大事です。

つまり、クラスメートがいじめをしているという情報を先生に伝えると、奨励金が与えられたり、あるいは内申書の点数がよくなるようなシステムを作る——このくらい徹底したことをやれば、いじめはかなり抑制できるはずですよ。

いや、「かなり抑制できる」というのではまだ不安が残る、根本的な対策が必要だということであれば、もつといい方法があります。

そもそもいじめが起きるのは、子どもたちが一カ所に集まって集団行動をすることにあるわけですから、学校教育を廃止すればいいのです。

つまり、大人になるまでは家庭の中で教育を与える。他の子どもたちとの集団行動は禁止す

る。いじめが起きる環境そのものをなくせば、間違いないいじめはなくなるわけですから、これが究極のいじめ対策になるはずです。

行為は禁止できても、心の働きは禁止できない

言うまでもないことですが、今、私が述べたような「対策」はまったくの暴論であり、現実性に欠けたものです。

そもそも子どもたちを完璧に監視するなど、そのための費用や手間を考えただけで実現不可能だし、いじめ対策とはいえ、友だちを平気で密告するような子どもに育てることが倫理的に正しいかといえ、大いに疑問です。かりにそれでいじめがなくなつたとして、そのために自由のない監視社会ができるのであれば、本末転倒に他なりません。

学校を廃止して、大人になるまで集団生活をさせないというのに至っては論外です。

しかし、いじめという行為をなくそうとすれば、ここまで徹底したことをしなければ、まず不可能だし、しかも、それが成功したとしても、それではたして本当に「いじめ」がなくなつたと言えるかは大いに疑問です。

なぜならば、それでたしかに「いじめ」という行為は押さえ込めるかもしれませんが、しかし、いじめをするという、私たちの中にある「人間性」はそれでは少しも変わっていないからです。

結局のところ、中国やソ連の政府が同志愛に満ちた人民を作れなかつたように、どのような教

育や制度を作ったところでも、いじめをする心は変えることができない。それが現実であるので
す。

「いじめ」を定義する

ここでちょっと、世の中から「いじめ」がまったくなくなったら何が起こるかを考えてみましょう。

一言で「いじめ」と言っても、その中にはいろいろなケースが含まれています。

まず、そもそも「いじめ」などという曖昧な言葉で呼ぶのではなく、れっきとした犯罪である「恐喝」「暴行」と呼んだほうがいいケースがあります。不良のグループが暴力で脅して金を持ってこさせるような場合です。自殺にまで至るようなケースでは、特定の生徒がしつこく脅され、どうしたらいいか分からなくなってしまうたという場合が多いように思われます。

私にはなぜこのようなケースを「いじめ」と呼ぶのか理解できません。世間一般ではれっきとした犯罪として認められているケースが、犯罪者と被害者が学校の生徒であると、「いじめ」という曖昧な言葉で呼ばれることになってしまふのは、事実を隠蔽していることにならないでしょうか？

さて、それとはもう一方の極にあるのが、いわゆる「しかと」にあたるケースです。つまり、特定のクラスメートを仲間はずれにしたり、あるいは無視したりする——何らかの（大人から見

れば)些細な理由によって、まわりのみんなが口をきいてくれなくなるというケースです。こうした行為は、被害者の心を傷つけるものではありませんが、それが犯罪かといえば、そうとは言えません。また「しかと」だけではなく、悪口を言われるとか持ち物を捨てられるとかいった形で、もつと積極的な意地悪をされることも多くありますが、これも犯罪に含まれるかどうかは微妙なところです。

私はこの二つを同じ「いじめ」という言葉で呼ぶことには反対です。その原因も、被害の内容もまったく違っていているからです。恐喝や暴力は犯罪として扱われるべきであって、「いじめ」などという曖昧な言葉で呼ぶべきではありません。

犯罪としての恐喝や暴力行為が学校から、あるいは世の中からなくなっても、世の中が暮らしやすい場所になるだけで、それ以外に何の不都合もおこらないでしょう。

秩序形成としての「排除」

しかし「しかと」の場合は、これと少し違うような気がします。

意地悪をとまなう「しかと」を、ここでは仲間からの「排除」という言葉で、もう少し一般化して呼ぶことにしましょう。

このような「排除」が恐喝や暴力行為と違うのは、実は「排除」を上からの権力に頼らないで、自分たちで自発的に集団や社会を維持していくために欠かすことができない行動原理であると見

ることも可能だからです。

このように書くと、「いじめ肯定論」だと誤解するむきがあるかもしれませんが、もちろんそうではありません。

たとえばあなたが属している集団の中に、自分の利益だけを追求し、まわりに迷惑をかけても平気な人がいたら、あなたはその人に対してどう対応するでしょうか。

あなたが受ける迷惑があまりひどくなければ、たぶんほうっておくでしょう。しかし我慢できなくなるほど迷惑がひどくなれば、何とかその人と話をして、その迷惑行為をやめてもらおうようにしようとするでしょう。でも、それでも駄目な場合には、どうしたらいいでしょうか。

まず第一に考えられるのは警察に訴える——上からの権力に頼る——ことです。もう一つの選択肢として考えられるのは、そうした迷惑なことをしている人に対する制裁として、まともに付き合うのは止める、ということ。つまり、集団からの排除という選択肢です。

まわりの人たちからの説得に耳を貸さない人に対しては、警察に代表される公権力に頼るか、自分たちで困った人を排除するように努力するか、どちらかの方法しかないわけですが、すべてのトラブルの解決を権力に頼り切ってしまうことに大きな問題があるのは、今さら言うまでもないでしょう。日常の小さな紛争にまで公権力が介入するようになってしまつては、行動の自由もない警察国家、監視国家が生まれてしまう危険性があるわけですし、また、そのような警察国家を維持するためには大変なコストを必要とします。

やはり権力に頼ることなく、自分たちで社会の秩序を維持するのが一番いい解決法であるというわけなのですが、権力に頼り切らないで何とかしようとするれば、先に定義した意味での「いじめ」を使わざるをえなくなるのです。つまり、集団のルールにしたがわずに、みんなに迷惑をかけても平気な人には排除をはじめとする「いじめ」で、思い知らせるしか方法はないというわけです。

もちろん、そのような場合のいじめ、つまり自発的な秩序形成の手段としての排除行動は、ふつうは「いじめ」という言葉ではなく、「集団のルール」「地域のまとまり」のためといった、もつと耳触りではない言葉で呼ばれていますが、自分たちの規範や基準にあわない人たちを排除するという点では、子どもたちの間でのいじめと何ら変わるものではありません。

かつては存在した「いじめ教育」

そこで学校での「いじめ」に話を戻せば、監視や教育によって——言い換えるならば、上からの権力によって——子どもたちのいじめをなくすことはできるかもしれません。しかしそうすることは、自分たちで自発的に社会秩序を作っていくという、人間にとって一番重要な心の働きを取り去ってしまうことを意味しているのです。

だからといって、もちろん、いじめは良いとか、いじめを奨励すべきだと言っているわけではありません。

たんなる好き嫌いや些細な理由で被害者を選んで、意味のない「しかと」や意地悪を繰り返すといったいじめは、とても許されるべきではありません。

子どもたちのそういったいじめが許されないのは、それが「間違った排除行動」だからです。つまり、「正しいいじめ」「適切な排除行動」の教育をちゃんと受けていないので、自分たち自身で適切にコントロールできないかたちで無差別にいじめをしてしまうというのが、現代の子どもたちのいじめの問題なのではないかと思っています。

一昔前までは、上級生から下級生までをふくむ子どもたちのグループがあつて、そのグループの中で自発的に秩序が作られていました。もちろんそういったグループの中では、乱暴なガキ大将が小さな子どもをいじめていたこともあつたでしょう。また、疎開してきた都会の子どもたちが生意気で気に食わないからという理由でいじめられたこともよくあつたでしょう。しかし、今の子供たちのように、理由もなくいじめの被害者が選ばれるということはあまりなかったように思われます。

さらに時代を遡れば、子どもたちが少し大きくなると、若者宿、若衆宿といったグループに入られ、そこで村の一員として生きていくための基礎訓練がなされてきました。そういった子どもたちのグループや若者のグループで教えられたのは、どのような行動が正しくて、どのような行動が許されないかという行動基準であり、またそういった基準に違反する人間に対するいじめをどう行なうかという、いわば「いじめ教育」でもありました。

逆にいえば、そういったグループでは、どうすればいじめを避けることができるのかという教育もされてきたわけです。

ところが困ったことに、今の子どもたちには、学校以外の場でいじめ教育を受ける機会がまったくありません。そのため、意味のない無差別的ないじめをしてしまうのではないかと筆者は考えています。

しかし、だからといって、すべてのいじめをなくしてしまおうというのは、英語の表現を使えば「たらいの水と一緒に赤ん坊を流してしまう」ことになってしまうのではないのでしょうか。そうなれば、後に残る選抜肢は警察国家、監視社会ということになってしまいます。

いじめを許す子どもたち

先に述べたように、子どもや若者宿といったグループでは、意味のない無差別ないじめが抑制されてきました。そういった無意味ないじめは、グループのリーダーによって抑制されていたからです。

そういったいじめ教育の場であるグループは、今の日本ではほとんどなくなってしまいました。その結果、いじめをし放題な環境ができあがってしまったのです。

結局のところ、日本のいじめに問題があるとすれば、それはいじめをする側にあるのではなく、「いじめを許す」環境が学校の中にできてしまっているところにある。そう解釈するのが、

より現実的と言えるのではないでしょうか。

実際、いじめについて、ひじょうに有益なフィールド・ワークを行なっている京大霊長類研究所の正高信男氏まさたかのぶお（比較行動学）の研究によれば、いじめ問題が起きている教室とそうでない教室とでは「傍観者」の比率がまったく違うという事実が明らかになっています（『いじめを許す心理』岩波書店）。

つまり、いじめ問題が起きているクラスでは、多くの生徒たちが傍観者の態度に終始していて、目の前で行なわれているいじめを止めたりする子どもがいない。これに対して、いじめ問題が起きていないクラスの子どもたちには、そうした傍観者の態度を取る子どもが少ないというわけなのです。

やはり、カギは「いじめをさせない」ことにあるのではなく、「いじめを許さない」環境を作ることにあるというわけです。

では、いったい「いじめを許さない環境」はどのようにすれば作ることができるか――。

それについての詳しい解説はのちほどゆっくり書きつもりでいるのですが、ここで私がみなさんにもまず知ってもらいたいのは、社会問題の解決を考えるためには「心がけを改めよう」などといった安直なスローガンに乗せられてしまうのではなく、もつと物事を根源的に考え、物事の本質的な部分に目を向けていただきたいたいということなのです。

「お説教」では世の中は変わらない

さて、「いじめ」の話が長くなってしまいました。

話を戻せば、本章の冒頭でも書いたように、今の日本ではいじめにかぎらず、さまざまな「不祥事」が起きています。たしかに、それらは重大な、深刻な問題であるのでしょうか。

しかし、たとえば食品の賞味期限を偽装した企業を批判し、その経営陣を退陣させれば、それで問題ははたして解決するのでしょうか。あるいは、いじめを起こした子どもを逮捕して、少年院に送れば、それで問題は解決したと言えるのでしょうか。

もちろん、問題を起こした当事者たちの責任を問うことは大事なことです。しかしながら、似たような不祥事が起きるたびに、まるで「モグラ叩き」のように責任者をつるし上げていくことが、はたして本当の解決と言えるのでしょうか？

それよりもやるべきなのは、なぜここに来て似たような不祥事が起きるようになったのか、その事情をきちんと分析し、対策を立てることではないでしょうか。

といつても、もちろんその対策なるものが「心がけを改めよう」式のスローガンであつては問題外というものです。

経営者たちのモラルを向上させよう、子どもたちに道徳教育をしよう——そうした「お説教」で問題が解決するのであれば、今ごろ、私たちが人類は何一つ犯罪が起きることもない「地上の楽園」に住んでいるはずですよ。

では、いったいどうしたらいいのか。

そこで出てくるのが「人間とは何か」の研究だというのが私の考えなのです。

我田引水がでんしんすいに聞こえるかもしれないませんが、人間の心の働きを知り、私たちの心の中にある「人性」の本質がどのようなものであるか、そうしたことをきちんと理解していくことが、私たちの社会で起きているさまざまな問題を解決する糸口になってくると思うのです。

「理性万能主義」からの脱却

脳科学や生物学などの急速な発展もあって、人間の心に関する見方や考え方は今や大きく変わっています。

タブラ・ラサの話がいみじくも示しているように、近代西洋思想では長らく「人間至上主義」「理性万能主義」が信じられてきました。

すなわち、人間と動物とはまったく別の存在であり、人間の理性の力があれば、あらゆる問題が解決できると広く信じられてきたのです。それは筆者が研究する心理学の分野も例外ではありません。

しかし、科学の進展は、そのような思想が「神話」にすぎないことを今や明らかにしつつあります。「我思う、ゆえに我あり」と言った一七世紀の大哲学者デカルトから始まるとされる近代西洋思想は、今や大きな転換点を迎えているといっても過言ではありません。

ところが、残念なことに「教育で心を変えられることができる」という意見が何の疑いもなく受け容れられていることでも分かるように、タブラ・ラサのような「神話」が今なお生き残っていて、それが社会問題を考えるうえで、本質を見失った議論がえんえんと続けられる原因になっていると私は考えているのです。

では、いつたい今の日本で起きているさまざまな社会問題をどのように考えていけば、「本質」に迫る解決策が見えてくるのか——その私なりの答えを、私がこれまで行なってきた研究成果を踏まえつつ語っていききたいと思います。

日本の「安心」はなぜ、消えたのか
山岸俊男・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,600 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7172-8

ウェブでのご注文は [こちらにどうぞ!](#)